水色の想い

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水色の想い

【Ｎコード】
Ｎ８６６０Ｈ

【作者名】
羽村奈留

【あらすじ】
【童話風】他の惑星で暮らす高い知能を持つ水陸両生のカタツムリの物語。研究過程の途中で偶然に生成された鋼。セラミック世界で暮らす宇宙物理学者クラム博士は、世界に１つしかない鋼を研究していくうちに、次第に鋼に心を奪われていく事になる。

第1話（前書き）

二枚貝のカタツムリは実際に生息しておりました。
ただ、絶滅危惧種だったので、現在は生息しているのか定かではありません。

第1話

ここは、地球から遠く離れた宇宙空間。そこに浮かんでいるのは地球と同じ色をした水の惑星。

惑星をよく観察してみると、陸と海中にセラミック質の建造物が見えます。

どうやらセラミック世界で暮らす生命がいるようです。

海岸にある浜は、カラフルなビーズを散りばめたようなガラス質の多い砂が広がっています。

その砂に打ち寄せる波は、ビーズ砂を含み、波の中のビーズは回転して動き、キラキラと光っていて綺麗です。

綺麗に光る波が作る海岸線には、カタツムリがいて、カタツムリは波と平行してゆっくりと這って移動しておりました。

カタツムリの背にある貝は二枚貝。アサリに似た扇形の貝の中に体を収納して隙間なくきっちりと貝を閉じる事ができました。貝は薄茶に濃茶のマーブル模様。貝から出ている体は黒っぽくて上面には雲母のような鱗が覆っておりました。

カタツムリには高い知能がありました。二千年という長く生きてきた寿命もありました。更に、長寿とは思えない昔と同じ若い肉体を持っておりました。

カタツムリの名前は、クラムといいました。

クラムは頭から二本の待ち針のように伸びた黒い眼で周囲を見回すと、波間の一点を見つめて、体を海へ向けました。

打ち寄せる波がクラムの体に当たります。波を受けたクラムの体は艶立って雲母の鱗は空に浮かぶ雲を映しております。

クラムは、這って背にある二枚貝を揺らしながら波の中に分け入りました。

彼の体は、私たち人間のように水面に浮いたりはしません。ビーズ砂に面している部分がしっかりとくっついているからです。でも、

それだけではダメです。まだ貝の中には空気が残っていて、クラムの体を水面まで押し上げようとします。

クラムは、浮力を完全になくすために、全身が全て海の中に入ってから貝を前後左右に揺すって貝の中にある空気を全て放出しました。

これでクラムの体は完全に浮力がなくなりました。海中でもゆっくりと這って進む事ができます。

クラムは水中の呼吸も可能でした。貝の中に海水を取り込み、海水に溶け込んでいる呼吸に必要な大気の成分を、分子レベルで抽出し体内に取り込む事ができたからです。カタツムリであるクラムの体は、水陸どちらでも生存できるように進化しておりました。

第2話

クラムはマイペースにゆっくりと這って、どんどん海の底へと進みました。

クラムが進む先には、ドーム型の建物がありました。

その建物は研究室でした。

研究室には、クラムが大切にしているあるものがありました。

それは、見上げるほど大変大きなもので、私たちがよく知っている鋼でした。

しかし、クラムたちカタツムリの種族が使う材質はセラミックのみ。そのため鋼は世界に一つしかない大変貴重なものでした。

鋼は、クラムの研究過程の途中で偶然にできたものでした。

クラムは、研究仲間の援助を得て二つ目の鋼を作ろうとしましたが、クラムたちが何度試みても、二つ目の鋼ができる事はありませんでした。

クラムが偶然に作り出した鋼は、私たちが知る鋼とは少し違っておりました。

鋼は、クラムたちの貝殻と同じく振動してパルスを出しておりました。クラムたちの言語パルスに共振したのではありません。自らパルスを出していたのです。

鋼のパルスは、クラムたちには理解できないものでした。言語なのか。信号なのか。単にパルスが出ているだけなのか。

鋼が発しているパルスは、クラムを含めた研究者によって、いろいろな角度から研究がなされました。その結果、単に振動しているだけで、言語にも信号にもなっていないのでは？　という意見が出始め、最終的に大半の研究者はそれに同意しました。

クラムもその意見に同意しました。でも、心の底では、鋼には命があり、何かの言語を発しているのでは、と思っておりました。

鋼は世界に一つしかないという事で、特別に建造されたドームに

保管される事になりました。
ドームに出入りできるのは、技術レベルの高い研究者のみでした。
クラムは、その一人でもありました。
クラムは、その権限を使い、みんなには内緒で鋼が発するパルスを研究する事にしました。
研究は単純なものでした。鋼が発するパルスを記録し、パルスの波を分析して法則を探し出す方法でしたが、何通りもあるパルスを研究するには気の遠くなるような時間が必要でした。
クラムは、鋼を研究し続け、三百年目にしてある結論に達しました。
鋼が発する言語は、歌なのかもしれないと。
それからのクラムは、鋼を歌姫と呼び、独りになると鋼の歌を口ずさむようになりました。

第3話

そんなある日。
クラムの下に同じ研究者のサースが訪れました。サースは角貝を背に持つカタツムリでした。貝の色はタマゴ色で、模様はありません。体の色はベージュで体に沿って背に三本の緑色系の縞模様があり、その上にある角状の貝は、細めでアイスクリームのコーンを逆さにしたようにサースの背に立っておりました。
「クラム博士。またこれと一緒にいるのですね。よくも飽きずに」
サースは、左右の眼の付け根から伸びた触手の右を鋼に向けました。
そう。クラムは、博士と呼ばれる宇宙物理学者でした。
サースは天文学の博士で、クラムとサースは親友といえる間柄でした。
クラムが鋼と一緒にいる時は、宇宙物理学の仕事はしておらず、肩の力を抜いて歌に聞こえる鋼の振動に耳を傾けておりました。
「この振動が心地良くてね。ついつい時間を忘れてしまうんだよ」
苦笑いを浮かべるクラムを見て、サースは呆れた表情をしましたが、なんで訪れたかを思い出して真剣な眼差しをクラムに向けて言いました。
「クラム博士。環境庁からの書類です。この惑星を覆う大気が、恐ろしい速さで変化しているらしいのです」
サースの話に、クラムは一瞬驚いた表情をしました。引き締まった表情になり、左右の眼の付け根から触手を伸ばしてサースから書類を受け取ると、さっそく環境庁からの書類を読み始めました。
「もしもの時は、我々貝の種族は、大気の悪影響を避けるために海中で生活ができるからよいが……」
そう言いながら書類を読むクラムの表情が強張り始めました。
「なんて事だ！　この星を覆っているガス雲が消滅し始めているだ

と！」
　クラムは、読んでいる途中で声をあげました。
　サースは、頷いてからクラムに言いました。
「そうなんです。ガス雲が消滅してしまうと、二つある太陽光線の直撃を受けて、気温は急激に上昇し、例え我々が海中に逃げたとしても、急激に上昇した大気の温度により、いずれ海水は干上がってしまうのです」
　書類を持っていたクラムの手が膝の上に落ちました。宇宙物理学の博士号を持つクラムは、ガス雲の消滅が何を意味しているのか、書類を読まなくても分かるからです。
「海が干上がり、逃げ場を失った我々は、死滅……」
「環境庁の計算によると、五十年以内にガス雲がなくなり、二百年以内に、海水はほぼ全てが干上がってしまうそうです。とりあえず我々は、地下シェルターに避難して、地下で脱出用の宇宙船を建造する事になりました。クラム博士も、この計画に含まれております」
　クラムは思いました。研究者たちは、貴重な研究材料を宇宙船に詰め込むだろう。大変貴重なものである歌姫も、同様に宇宙船に載せるはず。しかし歌姫は、見上げるほど大きくとても重い。単純に計算しても、二百年以内に建造できる宇宙船の規模は小さく、数もそう何隻も作れないはず。我々の仲間は、全員宇宙船に乗れるのだろうか。と。

第４話

クラムが歌姫と一緒にこの星から脱出すると誓ってから、約五十年が経過しておりました。

既にカタツムリたちは地下へ移住し、海水も蒸発しないように地下へ貯蔵されました。

高い知能を持つカタツムリにとって、惑星の九十パーセントを覆う海の水を地下へ貯蔵する事など簡単な事でした。

海水の貯蔵とは別に、地下を掘って作られた大きな空洞では、宇宙船が建造されておりました。

宇宙船は、ピンポン玉そっくりのセラミック複合材の球体でした。反重力装置により浮遊移動し、宇宙に出てからは宇宙船を包む四面体のバリアが宇宙空間にある塵などを弾くため、光速以上の速さでの移動が可能でした。

既に何隻か完成しており、希望したカタツムリ市民を乗せて宇宙へ旅立った宇宙船もありました。

クラムはというと、場所は海中から地下へと変りましたが、今も鋼の歌姫と一緒で、昼間は技術者として地下の空洞で宇宙船の建造に着任しておりました。

親友のサースも同じ空洞で宇宙船の建造に関わっておりました。

「いくら宇宙船の中で半永久的に生活ができるからといって、宇宙船が完成しました。では出発です。では、あまりにも安易過ぎる。宇宙は、軟体である我々には未知の領域。何が起こるか想像もつかないほど危険なのに」

天文学者であるサースは、先に出発した宇宙船に友人が乗っている事が納得いかないようで、クラムの横で愚痴を溢しながら、仕事机のシステムにアクセスをして、宇宙航路の星図を見直しておりました。

クラムは鼻歌を歌いながら、画面にある宇宙船の図面を見て、各

部分の強度をチェックしておりました。
「同じ天文学者の友人が心配なのは分かるが、宇宙船に乗れば、望遠鏡で観測できない宇宙域まで行けるからね。天文学者としての血が騒いだんだよ」
「だからといって、理論や実証より、好奇心のみを優先して宇宙船に乗り込むなんて、天文学博士として有るまじき行為ですよ」
「気持ちは分かるが、彼が送ってくれる宇宙の詳細な情報が必要な事も事実」
「確かに、そうですが。……。あー、苛々する」

第5話

左右の眼の付け根から伸びている触手を振り回して不機嫌になっているサースを見て、クラムはもしやと思い聞いてみました。
「あの宇宙船に乗っている天文学博士は、君の恋人だったのかね？」
クラムの言葉に、サースの触手の動きが止まりました。触手を床に落としてからサースはボヤキながら答えました。
「実は、そうなんです。友人として一緒に天文学の仕事をしておりましたが、本当は一緒に産卵したかったです」
この星のカタツムリは、全てが雌雄同体。
そのため、サースが恋人と思っている天文学者に雄雌の区別はなく、当然サースにも雄雌の区別はない。クラムも。
クラムの鼻歌が止まりました。サースを気の毒に思ったからです。
「相手に思いを告げて産卵しておけばよかったんじゃないのか」
「話はしました。しかし、お互い繁殖期になる前に宇宙船が完成してしまったので。宇宙船の完成と共に、私たちの関係も自然消滅してしまいました」
仕事中という事もあり、別れの辛さを感じているはずのサースの表情に動きはありませんでした。声だけが悲しげで、隣で仕事をしているクラムは、どう言葉を掛けていいのか分かりませんでした。
「そうか……」
クラムは、静かに短く答えるだけが精一杯でした。
地下に掘られた空洞は、ピンポン玉の宇宙船に合わせて球状になっておりました。
カタツムリは服足というものがあるので、多少のデコボコも難無く貼り付いて、壁や天井を移動することができます。
空洞の壁や天井には、宇宙船建造の技術者であるカタツムリが無数に貼り付いて作業をしておりました。
クラムも作業の確認のために移動して天井に貼り付く事もありま

た。各担当の責任者と意見を交わし、必要があれば次の宇宙船のために図面の変更を行っておりました。
宇宙船の建造現場にいる時、常にクラムの隣にはサースもおりました。二人はコンビを組んでいつも一緒に仕事をしていたのです。
サースはクラム以外には恋人と別れた悲しみを見せませんでした。なぜならサースはクラムの事を友達以上に思っていたからでした。
そしてそのサースの思いが、今後のクラムにどう影響してくるのか、クラムはまだ気付いていませんでした。

第6話

宇宙船の建造は順調でした。
建造が始まってから二十年のうちに殆どのカタツムリ市民は宇宙船に乗って惑星から脱出していきました。
クラムたちはまだ惑星に残っていて宇宙船の建設をしておりました。
もう宇宙船の図面の変更はする必要がなくなり、クラムはほかの友人から一緒に宇宙船に乗らないかと誘われた事もありましたが、クラムは歌姫と一緒に宇宙船に乗ると心に決めていたので、首を縦に振る事はありませんでした。
サースは、先に旅立った宇宙船から届く星の情報を集積して、常に星図の更新を行っておりました。
場合によっては、サースの仕事は不眠状態になるほど忙しくなる時もあったので、時間がある時はクラムもサースの天文の仕事を手伝っておりました。
サースの仕事の場所は、歌姫が置かれている空洞内でした。クラムが歌姫のそばに居る事が多いので、サースは仕事道具を歌姫のそばに持ってきたのでした。
気付いるかもしれませんが、クラムたちカタツムリには住居というものがありません。彼らが背負っている貝殻が家の代わりになるからです。
技術が高度に発達していたため、欲しい物も苦労する事なく手に入れる事ができたので、クラムたちの時代は通貨が必要の無いものになっており、お金も貴重品も住居を造って保管する必要がなかったのです。
クラムが睡眠をとる場所は歌姫のそばでした。歌姫と呼ばれる見上げるほど大きな鋼のそばに、薄茶に濃茶のマーブル模様のアサリに似た貝殻がきっちりと蓋をした状態で置かれている。そう想像し

て頂くとよいかもしれません。
歌姫は、大気を遮断するバリアの中に入っていたので、直接触れる事はできませんでしたが、クラムにとって歌姫と同じ空間にいる事はとても幸せな事だったのです。
サースは、クラムの事を熱心に歌姫を研究する学者だと思っておりました。
殆どの学者は、歌姫に飽きてしまったり、専攻している本来の研究を優先にしていたので、惑星を脱出しなければならない最近は得に歌姫が置かれている空間に立ち寄る事もありませんでした。
ある意味、サースにとっては、それは好都合な事でした。なぜなら、クラムと二人っきりでいられるからです。
クラムは、サースの中に育っている思いに気付いておりませんでした。なぜなら、クラムは歌姫しか見ていなかったからです。
本日もクラムは歌姫のそばで目覚めました。二枚貝が開いて、背に雲母に似た鱗をつけた胴体が中からにゅるにゅると出てきて床に密着し、最後に顔が出てくると、二枚貝をゆっくりと持ち上げ移動させて背に乗せました。同時に待ち針のような眼を伸ばして、瞳をぱちくりと瞬きさせて、歌姫を見ると、今も歌姫はパルスを発して歌っております。
クラムは歌姫の歌をマネて鼻歌を歌いながら周りを見回してサースの仕事の状況確認をしました。
サースは、仕事机の近くで眠っておりました。ソフトクリームのコーンを逆さにして地面に置いたみたいに、タマゴ色の角貝が机によりかかっている。そう想像して頂くとよいかもしれません。
昨夜のサースは、クラムが寝る頃になっても星図の仕事をしておりました。
目覚めた今、クラムがサースの机を見てみると、書きかけの星図がそのままになっています。どうやらサースは昨夜も遅くまで仕事をしていたようです。
クラムはサースがよく眠れるように、物音を立てずに移動して、

また歌姫を見上げました。
私たち人間にとっては何の変哲もない鉛色の黒っぽい塊。ただ違うところは、自らパルスを発するという事。
私たちの世界には、パルスを発生させるものとしてシンセサイザーがありますけど、やはり電子回路など必要な機器がないとパルスを発生させる事はでません。だからクラムの世界にある歌姫は、私たち人間にとっても貴重な鋼なのかもしれませんね。
クラムは歌姫のパルスに合わせてまた鼻歌を歌いだしました。そして歌っているうちに気付いたのです。いえ、気付いたというより、赤ちゃんが長い年月をかけて言語を覚えるように、クラムもまた長い年月をかけて歌姫のパルス言語を会得したのです。
クラムの脳内で構築された歌姫のパルス言語。
それを使ってクラムは歌姫に歌い返しました。
すると返事が返ってきたのです。
「！」
クラムは喜びの余り声をあげそうになりましたが、サースが眠っているので必死に我慢しました。
これで歌姫と意思疎通ができる！
そう思ったクラムは、歌姫と向き合い無我夢中で歌姫の言語で話しかけたのでした。
クラムが夢中で歌姫と会話をしている時に、サースは目覚めました。角貝の下部が持ち上がり、下からにゅるにゅると胴体が出てきました。伸びきった胴体から頭が現れ、待ち針の眼が上に伸びて瞳が現れました。見ると、いつもの如くクラムが鋼のそばにいます。ただ違うのは、クラムの左右の眼の間の皮膚が盛り上がっていた事でした。
地球のカタツムリは、繁殖期になると左右の眼の間の皮膚が隆起します。これは頭瘤（とうりゅう）と呼ばれるもので、専門家によってはもろこしヘッドと呼んだりします。
クラムにもろこしヘッドがあるという事は、クラムの体は繁殖期

に入り、いつでも産卵が可能な状態だという事になります。
サースにとって、クラムのもろこしヘッドは受け入れられない事実でした。胸は焼けるように熱くなり、サースは息ぐるしさを感じました。しかし、まだ事の事態を把握しておりませんでした。だからこう思ったのです。クラムの産卵相手は、どのカタツムリなのか？　と。
それからというもの、サースはクラムが意見交換をするカタツムリを注意深く観察するようになりました。
しかし、どのカタツムリにも平均的に接するクラムの態度に、サースはクラムの産卵相手を特定する事ができず、暇があるとクラムの行動を分析して考え込むようになったのです。サースは、クラムの事しか考えられないくらいクラムがとても好きになっていたのでした。

第7話

そんなある日、最後の宇宙船の完成が近づいてきました。
もしもの事を考えて、余分に二隻の宇宙船も建造していたので、今星にある宇宙船は合計で三隻になります。
この頃になると、クラムの宇宙船の図面の変更も無くたまに現場に出て見て回るくらいしか仕事はなかったので、クラムは研究室の歌姫と一緒にいる事が多くなっておりました。
クラムは、研究室に一日中いても退屈しませんでした。なぜなら、歌姫と雑談ができるからです。
歌姫のパルスはいろいろな事をクラムに伝えました。歌姫には意思もありました。それなりの知能もありました。
そしてクラムは知ったのです。歌姫の本当の名前を。
「君には名前があったのか」
クラムは驚きながらも、とても幸せでした。歌姫と会話を続けて、知る事ができた名前。歌姫の本当の名前は、クラムにとって不思議で心地よいパルスの振動でした。クラムは全身で歌姫のパルスを感じておりました。歌姫のパルスに包まれている事が、唯一の安らぎでもあったのです。
クラムが喜びに満ちている時に、サースが宇宙船の星図のプログラムを終えて研究室に帰ってきました。見れば、クラムが歌姫と向き合っています。またいつもの事だとサースが仕事机に書類を置いた時、クラムの声が聞こえたのです。
「歌姫。君と産卵できたら、私はどれほど幸せになれるか」
サースは驚きました。クラムの産卵を望む相手がカタツムリではなく鋼だったからです。その時です。サースの心の中に黒い濁ったものが現れました。それは歌姫に対する憎悪でした。
「あの塊には、歌姫という名前があるのか！」
サースは、クラムを思うあまり、嫉妬を通り越して歌姫に憎悪を

抱いてしまったのです。

第8話

私たち人間にとって、パルスを発する金属は、通信機だったり楽器のシンセサイダーだったり電子回路が組み込まれたもの。クラムにとっては、意思があり言語を話す鋼。サースにとっては、恋敵の鋼。

それからサースの行動は一変しました。サースは、歌姫をどうやって処分すればいいか考え始めたのです。とりあえず、歌姫を見ているクラムに話しかける事にしました。

「クラム博士。今日もこの塊を見ているんですね。もうどの博士も研究しなくなったのに、クラム博士は熱心に鋼を研究していらっしゃる」

「サース博士。私にとって、この塊は、研究対象であり、不思議な塊であり、長年一緒にいた掛け替えの無い存在なんだよ」

歌姫への思いを告げたクラムの眼差しは、一度もサースを見ることもなく、ずっと歌姫に注がれておりました。

サースは思いました。その眼差しは、欲しくても手が届かない『愛』なのだと。そして更に鋼が憎くなったのです。

次の日、サースは宇宙船の建造技術者にこう進言しました。

「私が搭乗する宇宙船で、ある実験をしたいので、研究室にある塊を宇宙船に積み込んで下さい。塊は大きいので、持ち運べるように、適当なサイズに切断して載せて下さい」

「しかしですね。サース博士。あの塊は、世界に一つしかない大変貴重なものです。私たちのような一介の技術者が、貴重な塊を勝手に切断する事はできません」

宇宙船の技術者は困った表情をして動揺しながら答えました。

しかし、サースの表情は凍りついたように冷たく、宇宙船の技術者の話を聞き入れるつもりはなかったのです。

「塊の切断は、この天文学者の私が許可します。宇宙航路用の星図

製作のために、あの塊がどうしても必要なのです。もし何かあったら、許可は私が出したと伝えて下さい。塊の研究はすぐにでもしたいので、今から切断を始めて下さい。宜しくお願いします」
そう言うと、サースは足早に立ち去りました。なぜなら、クラム博士が塊の切断を知ったら絶対に反対するため、塊からクラム博士を引き離さないといけないからです。
サースは、急いで研究室に戻りました。
案の定、クラム博士は鋼と親密に見つめ合っておりました。
サースは嫉妬による息苦しさと胸の痛みを我慢してクラムに近づきました。
「クラム博士。助けて下さい。私はどうしたらいいのか分からなくなってしまいました。先に飛び立った宇宙船から連絡を受けて星図を作成していたのですが、あまりにも複雑で、混乱してしまって、もうどうしたらよいのか分からなくなってしまったのです」
サースは左右の眼の付け根から触手を伸ばしてクラムの前で頭を抱えました。これは、クラムを鋼から引き離すための演技でした。しかし、今のサースは鋼に嫉妬をしていて、胸が苦しかったので、どうしたらよいのか分からないという演技は、サースの本当の苦しい思いでもありました。
それを見たクラムが、サースを疑う訳がありません。
「大丈夫ですか？　サース博士。とりあえず、何か飲み物をとってきますので」
「いえ。クラム博士。私は外の、どこか広い空間に行きたいです。ずっと星図を見ていたので、息が詰まりそうで、苦しいので広い場所に出て気分転換をしたいのです」
「分かりました。建造中の宇宙船が見下ろせる場所へ行きましょう」
「すいません。ご迷惑をお掛けして」
「いえいえ。困った時はお互い様ですよ」
クラムが触手を差し伸べると、サースは寄りかかるようにしてクラムの触手を掴みました。サースが寄りかかったのは、苦しいので

はなく、大好きなクラムにくっつきたかったからでした。
こうして、何も知らないクラムは、サースの策略により、歌姫から離れる事になりました。
その後、クラムがいなくなった研究室に技術者がやって来て、歌姫を持ち出したのはいうまでもありません。

第9話

サースは、クラムと一緒に地下空間に作られた見晴台に行きました。

見晴台は、建造中の宇宙船を見下ろすために作られたもので、クラムが宇宙船の図面作成の仕事をしている時にサースとよく来た場所でした。

最近は、数隻の宇宙船の建造だけとなり、クラムの宇宙船の図面の変更作業は殆ど無かったので、サースにとってクラムと一緒に見晴台に来て宇宙船を見下ろすのは久し振りの事でした。

「クラム博士とここに来るのは久し振りですね」

「言われてみればそうですね」

サースとクラムは、背にある角貝と二枚貝を並べて、眼下の宇宙船を見下ろしました。

宇宙船はほぼ完成していて、搭乗手続きをした市民が各自の荷物を宇宙船の中に運んだりしています。

クラムは過去を振り返り、美しかったビーズ色の浜辺を思い出して、故郷の星を離れなければならない郷愁に駆られながら、荷物を運ぶカタツムリたちを眺め続けました。

「宇宙船を建造し始めた頃は、星の表面温度が上昇する二百年以内に、全市民を宇宙船で脱出させる事ができるかどうか、自問自答したものです」

「できない、無理だと言って、自殺してしまった博士もいたが、クラム博士、あなたは見事に成し遂げた」

「それは、サース博士やほかの博士たちの協力があったからです。私一人では、とてもできなかった」

そう言って、クラム博士はサース博士を見ました。

サース博士は、顔色がよく気分もよさそうです。

「サース博士。ご気分は？」

サースは、二人でいられる時間に酔いしれていたので、クラムに聞かれるまで、気分が悪い振りをしなければならない事を忘れておりました。突然のクラムの問い掛けに、焦ったサースは仮病がバレやしないかと焦りながら答えました。
「き、気分ですか。まだ、息苦しさはありますが、広い場所に来たので、前よりは楽になりました」
サースは、クラムが仮病に気付いたかどうか確かめるために、俯いた状態で横目でクラムを見ましたが、クラムは全く気付いていない様子で、サースはクラムに背を向けてホッと胸を撫で下ろしました。
その時です。クラムが声を上げたのは。
「あれは！」
サースは、クラムを見ました。
クラムは、青ざめながら眼下の宇宙船を見ておりました。
サースが宇宙船を見ると、切断されて小さくなった鋼が作業員によって宇宙船の中に運ばれているところでした。
クラムは、サースの横で声を上げ続けました。
「なぜだ？　どうしてなんだ？　誰が指示を出したんだ？」
クラムは、サースを残して見晴台を飛び出しました。触手を伸ばして近くの柱に絡めてから振り子の原理でターザンのように空間を移動して、数秒で宇宙船の搭乗口にたどり着きました。
クラムの目の前を、切断されて小さくなった歌姫が次々に運ばれていきます。
クラムは、作業員の一人を捕まえて聞きました。
「なぜ塊を切断した？　誰の指示だ？」
「ひゃ」
作業員は、クラムの形相に恐怖を覚えて短い悲鳴をあげました。唇を震わせながら、クラムの問いに答えました。
「サース博士の指示です。航路用の星図作成に必要とかで」
「なんだと！」

クラムの声は、地下空間に響き渡りました。

第１０話

当然、見晴台にいたサースにも聞こえておりました。
サースは、触手を伸ばして、先ほどのクラムと同じく、振り子の原理を使ってターザンのように空間を移動して、宇宙船の搭乗口に着地しました。
「クラム博士。どうしたのですか？　取り乱して。あなたらしくもない」
クラムの表情は変っておりました。もうサースに対しての優しさは無く、目尻を上に引きつらせてサースを睨みつけておりました。
「なぜ塊を切断させた？　なぜだ？」
クラムの低く轟く声を聞いても、サースは笑顔を保った状態で答えました。
「宇宙船のアンテナにしたかったのです。あの塊は、セラミック複合材のアンテナより共振率がとてもよいので、遠距離にいる宇宙船との交信に必要なのです」
「だからといって、ほかの博士の意見も聞かず、独断で塊を切断するとは、どういうつもりだ？」
クラムの口調は荒々しいものに変っておりました。
周りにいた作業員は、クラム物言いに怯え、切断された鋼を持ったまま立ちすくんでおりました。
サースは、冷静に周囲を見回してから、クラムに言いました。
「ほかの博士の意見を聞くまでもありません。塊は、以前から研究がされなくなり、置物同然でした。それを宇宙船のアンテナとして活用するのです。誰が反対するというのですか」
クラムは言い返す事ができませんでした。
冷静になって考えれば、サースの意見は道理に適っていたからです。
それはクラムを更に怒らせる結果になりました。

クラムは宇宙物理学博士とは思えない行動をとりました。近くにいた警備カタツムリの銃を奪ったのです。
「動くな！　動けば、このトウガラシ銃で撃つ事になる」
トウガラシ銃。それは、ご想像の方もいらっしゃると思いますが、赤いトウガラシの液体が入った水鉄砲でした。
カタツムリがその液体を浴びると、細胞組織が溶けてしまうという、恐ろしい水鉄砲です。
善い子の皆さんは、絶対にマネをして作らないで下さいね。人間の皮膚にトウガラシ液がかかるとヒリヒリして、人によってはただれて火傷のようなケロイド状の痕が残ってしまうので。
クラムは触手でトウガラシ銃を持ってサースに近づきました。
周りにいたカタツムリの誰もが、サースが撃たれると思って、クラムが持っているトウガラシ銃を恐ろし気に見ました。
非常事態を察知して集まってきた警備員は、サースを助けようと思いましたが、常軌を逸したクラムが恐ろしくて、動く事ができません。
クラムは、サースの横に立ちました。そして、サースの首に銃口をくっつけました。トウガラシ液で首が溶けたら絶対に助かりません。クラムは、その事を承知の上でサースの首に銃口をくっつけたのです。
「塊を全て宇宙船に乗せるんだ！」
クラムの声は怒りと興奮によって怒号と化しておりました。
怖がっている作業員は、体が凍り付いてしまい、なかなか動こうとはしません。
「早くしろ！」
クラムは叫んで作業員にトウガラシ銃を向けました。
作業員は悲鳴をあげました。
「運びます。運びますから、撃たないで下さい」
作業員は急いで鋼を宇宙船に運びました。

第１１話

加工しやすいように切断された塊は、黒いレンガくらいの大きさになっておりました。
クラムは怒りと悲しみで目頭を熱くしながら、黒いレンガに変わり果てた歌姫を見ておりました。
サースは、隣にいるクラムをずっと観察しておりました。塊に気を取られているクラムの今の状態なら、クラムから逃げる事も可能でしたが、最愛のクラムから逃げようとは全く考えておりませんでした。
「クラム博士。宇宙船に乗って、塊と一緒に逃げるつもりですか？だったら、私を一緒に連れて行って下さい。あなたは既に犯罪者。このままでは、あなたは追われる事になる。私を人質にすれば、所詮広い宇宙。追って来る警備もいつかは諦める事でしょう」
サースの鋼切断計画は、逃げる事も考慮して、そして逃げ切ったあとにクラムと一緒に産卵をしようとまで考えてあったのでした。
しかし、事はサースの思い通りにはいかなかったのです。
クラムは、惑星屈指の宇宙物理学者。クラムの明晰な頭脳は、サースの企みに気付いてしまったのです。
「やかましい！」
クラムは、サースに向って怒鳴りました。
サースが、「やかましい」という言葉をクラムから聞いたのは初めてでした。
「やかましい！？　あなたが、そんな言葉を使うなんて。クラム博士。気でも狂ってしまったのですか？」
クラムは冷めた視線をサースに向けました。
「気が狂った？　そうかもしれない。もうこの星も、お前たちも、どうでもよくなってしまったのだからな」
クラムは、作業員が鋼を全て宇宙船に運んだのを見届けてから、

サースを盾にして移動を始めました。
「何があっても、動くな！　動けば、サース博士をトウガラシ銃で撃つ事になる！」
クラムのあとに続いて、サースも言いました。
「みんな、動かないでくれ。私は大丈夫だ。クラム博士も、無闇に打ったりはしないはずだから」
サースの声を聞いたカタツムリたちは、頷いたり目配りをしたりしながら、宇宙船の中へと移動するクラムとサースを見守りました。
クラムは、サースを引き摺るようにして連れて移動しながら宇宙船に乗り込みました。
「私は、クラム・ボーン。コードＳ２５Ａ４６Ｎ９１Ｇ８８Ｏ３７」
宇宙船の有機コンピューターは、クラムの声に反応して答えました。
『クラム・ボーンの音声確認完了！　マスター・クラム。ご指示を』
「今すぐ浮上だ。浮上後、大気圏外へ！」
『現在、空港が封鎖されており、大気圏外への移動はできません』
「ならば、空港を破壊して、穴を開けて大気圏外へ出ろ！」
こんな恐ろしい事を言ってしまえる二枚貝のカタツムリは、本当にクラムなのでしょうか。姿形、そして声もクラムなのですが、口から出る言葉は、とても温厚なクラムとは思えない言葉ばかりでした。

第12話

サースもそう思ったに違いありません。
「クラム博士。あなたは、気が狂ってしまったのですか？　たかが塊ではありませんか。なぜあの塊にそこまで執着するのですか？」
クラムは、サースを突き放してから、サースの顔に銃口を向けました。
「執着だと？　違う。私は、あの塊を、歌姫を愛しているんだ！」
サースは既に気付いていた事でした。クラムの告白に驚く事もなく、チャンスは今かとばかりに問い質したのです。
「塊には命が無い。なのに、あなたは、あのどす黒い塊を愛した。今も、あのように小さく切断された塊を、愛している。それが惑星屈指の宇宙物理学者のする事なのですか？　クラム博士。私は、あなたに聞きたい。なぜ、あの塊を愛したのですか？」
クラムは、口から息を吐きました。口から出た息は、クラムの怒りから出た溜め息とは違い、とても静かでゆっくりとした息吹でした。
「正確に言うと、私が愛したのは、歌姫ではない。歌姫がずっと受信し続けていた、他の惑星からのパルスなんだ。パルスを出していた惑星には、生命が存在していた。私たちのように宇宙に出るのは困難なようだが、惑星内の通信は高度に発達していて、私たちの星にまで通信のパルスは届いていたんだ」
クラムの話を聞いて、サースは驚きました。そして、誰にも言わずに独りで塊を研究し、長期に渡り他の惑星の生命と交流していたクラムを恨んだのでした。これは、サースの嫉妬でもありました。
「とても宇宙物理学者の行いとは思えない。クラム博士。あなたが研究していたのは、塊ではなく、他の惑星の生命なのですね。なぜ、天文学者である私に、生命が存在する惑星の事を知らせてくれなかったのですか？」

「知らせるなど、とんでもない。サース博士には、全く関係が無い事だ。これは、私と歌姫の問題なのだから！」
「は？　天文学者である私が、生命がいる惑星とは関係ないですと？　クラム博士。何を言っているのですか？　理解ができない」
困惑するサースの表情を見て、クラムは右の口端を吊り上げて不敵に笑いました。
「愛する相手との間に、誰かがいては困るんだよ。君に理解してもらおうなどとは、思ってもいない。歌姫が理解してくれれば、それでいいんだ！」
クラムの言葉が終わった時、宇宙船は浮上を始めました。
クラムは、トウガラシ銃をサースに向けたまま続けて言いました。
「さようならだ。サース博士。二度と、会う事はないだろう」
「二度と会う事はないって？　急に何を言い出すのです？」
サースの言葉が終わった時でした。クラムがトウガラシ銃の引き金を引いたのは。
銃口から発射されたトウガラシ液は、サースの顔に向っておりました。
サースは避けたものの、体の半分が搭乗口から出てしまったために、宇宙船からサースは転落したのです。その時にトウガラシ液はサースの右目に当たりました。
サースは、右目の痛みを我慢しながら全身を角貝の中にしまいました。
角貝は、くるくると回転して地面に落ちました。地面は凹み、貝にはヒビが入りましたが、中のサースは無事でした。トウガラシ液で溶けてただれた右目以外は。

第１３話

宇宙船は、空港に向っておりました。
地下空洞内を移動する宇宙船は、セラミック複合材の大きな球体。反重力システムにより浮遊して、音も無く静かに移動しておりました。
先ほど宇宙船のコンピューターが答えたとおり、空港は閉鎖されており、空港に侵入するのは不可能でした。
宇宙船は、四面体のバリアを張り巡らしました。四面体の角の一つを空港に向けた時です。角は熱を帯び、角の周囲に円形の虹ができた瞬間、角からオーロラそっくりの帯状の光が飛び出したのです。
オーロラの光は、空港に到達しました。光が到達しても空港は静かな状態でした。ですが、約五秒後に突然発生した黒い球体に、空港は飲み込まれたのです。
黒い球体は、クラムたちカタツムリの高度な科学力により作り出されたブラックホールだったのです。
ブラックホールは、空港を飲み込んだ後、消滅して消えてしまいました。
空港は消え、開いた穴からは、宇宙の星々が見えました。
同時に、地下空洞内は突風が起こり、竜巻と化した暴風は、地下空洞内にあった物やカタツムリたちを吸い上げて、開いた穴へと運んでいったのです。
多くのカタツムリが、開いた穴から大気圏外へ飛び出していきました。
事の次第を把握して、触手を伸ばして何かに掴まったカタツムリは助けを求めました。
宇宙船に乗り込む事ができたカタツムリは、生存者の救出に専念しました。
クラムはというと、宇宙船から、荒れ狂う風の中で悲鳴をあげて

蠢くカタツムリたちを助ける気も無く、冷めた目で見続け、枯れ果てた心で別れを告げておりました。
「私は、もう、何もいらない。歌姫と一緒に居られれば、それでいい」
そしてクラムは、切断されてレンガくらいの大きさになった歌姫の一つを触手で拾いあげて、頬にくっつけて涙を流しました。
「君は、こんなに小さくなり、歌わなくなってしまった。でも、それでも、私の思いは変らない。今でも君の歌を思い出せる。二進数の、時には十進数の歌が。愛してるよ。歌姫。そして、君のもう一つの名前、カガリ」
クラムは一頻り泣いてから、宇宙船のコンピューターに指示を出しました。
「進路を変更。座標Ｒ７３５　Ｐ２５０　Ｖ２４４　Ｃ……」
コンピューターは、クラムの指示に従い進路を変更しました。
『進路変更を完了。座標カガリの星、地球へ向います』
宇宙を移動する白いセラミック複合材は、四面体のバリアに包まれた巨大な球体。カタツムリ市民が半永久的に生活する住居設備を持った宇宙物理学者クラム・ボーンが設計した最高傑作の巨大宇宙船。
それに乗り込んでいるのは、クラム・ボーンただ独り。そして、クラムの傍らにあるのは黒いレンガになった個々の鋼。
宇宙船が向っているのは、私たちの星、地球。
しかし、宇宙にあるのは小さな星の輝きばかりで、青い星である地球がどこあるのか、クラムにも、私たちにも、全く見る事はできないのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8660h/

水色の想い

2010年10月8日15時49分発行